

# とりかぶとさんの作品 箱

はいぱーとりかぶとさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

個人的に書いたオリジナル作品。

誰でも感想を書けるように設定しておりますので、感想もあればお願ひします。

高校時代の部活で書いた1（雨）、2（花）作目  
作品ごとでバラしました。

花の方を読みやすいように開けました。

# 目 次

迎え雨：リティイク

迎え雨：リティイク

花は散りそして世界は巡りゆく：リティイ

ク

花  
ー  
1

花  
ー  
2

14 6

1



# 迎え雨：リテイク

——雨が降つていた。

真つ暗な空からぼつぼつと涙のように降つてきて、いつの間にか地面に染み込んでは消えていく。それは生き物が生まれ、そしていつか自然に還ることと同じようにも思える。

私は雨が嫌いだ。なぜなら雨に濡れると服が貼り付いて気持ち悪いし、体温を奪われるせいで体が弱い私は体調不良を起こしやすい。それに空が暗いせいで心も落ち込むし、気のせいだとは思うけどおかしな人を見かけることが多い。

——だけど、雨音は好きだ。奏でる音が子守唄のようで安心するし、もう少し経つて夏になれば大体の地域で鈴虫やセミとの合奏が聞ける。それに田舎だと機械の音が都會よりは少なく、虫たちが多いので、より自然でキレイな音が聞けるから雨音は好きだ。

——さつきまでは灰がかつたくもり空からぱらぱらと細かい粒が降つていただけなのに、いまでは空も黒く暗くなり、ざあざあと大きな粒が滝のように降つている。

私は今日、雨具を家に忘れたせいで学校から帰れなくなつていた。

教室の中で私以外に残つているのは、普段からお迎えを待つてゐる男女数名だけで、その数名は教室の中心にまとまつて、動物園にいる猿のようにうるさく騒いでいる。

私は静かな方が好きなので彼らのようにぎやあぎやあと騒がしい人たちは嫌いだ。少し声を抑えてと注意したいが、こういうタイプの人たちはすぐ暴力に走るからそういう点でもああいう人たちは嫌いだ。

彼らのお迎えが来るまでの辛抱だ。そう思つて彼らから視線を外し、窓を開けて外をのぞくと、雨雲が切れ目なく空を覆つていて二つ先の交差点にあるコンビニすら見えないほどに雨が強い。だが、こんなにも激しい雨の中でも校庭では照明をつけて沢山の人たちが一生懸命に運動をしていた。

こんな雨の中なのに頑張るなあとつぶやいて私は教室に視線を戻す。

いつの間にか先程まで騒いでいた彼らにはお迎えが来ていたらしく、彼らのいた場所にはいくつかの大きなゴミと大量の黒いシミが残り、私だけになつた教室に静寂が訪れる。そのおかげで外で行われている運動と雨が窓ガラスを叩く以外の音は無くなつていた。

——退屈だな。と言葉がこぼれ、それを紛らわすために自分の持ち物を机に広げる。シャーペンやホチキス、カッターなどをひとつひとつ壊れていなか、錆びていなか

と丁寧に点検する。

持ち物の点検が終わつてしまつた私は、再び窓を開けて外をのぞく。暗いのは相変わらずだが、先程まで運動していた人たちはほとんど帰つたようで今は雨音にかき消されるほどまで声が少ない。

——退屈だな。再び視線を教室に戻すと、彼らが残していつた大きなゴミと黒いシミで汚れた床。散らかつた机と椅子が目にに入る。それを見た私は、どうせやることも無いしと掃除を始める。

まず最初に、大きなゴミを小さく切り分けて、掃除用具のロツカーに常備されているゴミ袋に詰め込んだ。

そして各階の端にあるゴミ収集用エレベーターにゴミを放り込む。

明日になればこれらはゴミ収集車によつて焼却所か埋め立て地まで運ばれていくのだろう。

次に水道で雑巾を何枚か濡らし、バケツの半分くらいに石鹼水を入れたものを準備して教室の床を拭き始める。

黒いシミは床にべつちやりとこびりついているため、何度も何度も念入りにこすり、床全体に存在する限りのシミを見つけては完全に消してピカピカになるまでこすり続けるという作業を繰り返した。

終わっちゃつた。床のシミをすべて消した私は、机も全て足から天板までをピカピカになるまでこすり、桜を生けてある窓際の花瓶も、簡単に洗つてから水を変えた。黒板も粉ひとつないほどに隅々まで拭いて、光が反射するまできれいになつた。

——また暇になつちゃつた。そんなことを思いながら、空腹を感じた私は進級した時よりキレイになつた教室で、お昼に食べ損ねていたクッキーを食べることにした。クッキーは砂糖を入れすぎたようで今まで食べたものより数段甘くなつてしまつていて、焦げが多いからか苦いような気もする。だが初めて自分で作つたにしては十分美味しくできているだろうと思えた。

そろそろお迎えこないかな。私は再び窓際から外を眺めながらクッキーをゆつくりと味わつて食べていた。

気付けば外で行われていた運動はすでに終わつたようで、点いていた照明が消えて真っ暗になつっていた。そして校内で明るいのは私が今いるこの教室と職員室くらいしかないと理解すると、不思議と世界にひとり取り残されているような孤独を感じた。

雨、止まないな。私は再び教室を見回す。

——暇を持て余した私は、窓枠に寄りかかつて外を見下ろしながら、いつ来るかもわからないお迎えをただ待つてゐる。

だが、先程までやつてゐた掃除で多少なりとも疲れているのか、少しづつ目蓋が重く

なり、視界もぼやけてきた。

このままでは眠つてしまいそうだと思い、私は伸びをしようと立ち上がる。

——瞬間、全身から力が抜け、前のめりに倒れこんだ。その衝撃で花瓶も倒れてしまい、花瓶に入っていた水が床に垂れてきていた。

——早く花瓶を起こさないと。そう考えて立ち上がるが、意識が朦朧として体に力が入らない。

なぜ力が入らないんだろう？ 思考を巡らせ、私は悟った。やつと私にも『お迎え』が来たのだと。

雨音の子守唄に誘われて、薄れゆく意識の中、小さな水たまりに舞い落ちた桜の花びらを見て、花見酒のようだな。と、そんなことを思いながら、私は深い眠りに身を委ねた

# 花は散りそして世界は巡りゆく：リティイク

## 花ー1

——私は真っ暗な一本道を目的も無くただ歩いていた。私自身、ここが何処なのかはわからない。それに、いくら記憶を探つても、いつも通りの学校帰りに、いつもの道を通つて家に帰ってきた。という程度のことしか思い出せない。

変わり映えのない真っ暗な道を歩き始めてから、おおよそ十数分ほど経つただろうか、疲れた私は荒くなつた呼吸を整えようと膝に手をついた。

——カタン。

暗闇に音が響き、反射的に顔を上げると、正面に微かな光を見つけた。  
そして私は、正面の微かな光を目標にして一步ずつ歩き続ける。

光の漏れ出る扉に辿り着くと、扉は私を招き入れるかのように開け放たれ、扉の先に現れた光景に息を呑む。

「——すごい棚と本の量 ここつて図書館なのかな？ それに上の階にも本がびつしり詰まつてゐるし天井も高い 一体何フロアあるんだろ？」

建物の中心部に位置すると思われる吹き抜けから上を見る。だが、吹き抜けは天井が存在するのか疑問になるほど高く果てが見えない天井に吸い込まれるのではないかとさえ錯覚する。

私はその感覚に、呆然と立ち尽くしていたが、どこからか聞こえた声で意識を引き戻された。

「ようこそ、僕の図書館へ。——君はどんな物語をお探しかな?」

声の方に振り返ると、そこには高級そうな机と椅子があり、机にはいくつもの本が所狭しと置かれ、椅子には私と同年代と思われる赤と黒が混在する髪の青年が腰掛けていた。

「さて、困惑しているようだし、まずは僕の自己紹介といこう」

彼は読んでいた本に葉を挟み、ゆっくりと立ち上がる。

「——僕の名は狩間業。この図書館の管理者で司書も兼ねている。姓名どつちで呼んでくれても構わないよ」

彼は一度腕を広げてから、フワリと丁寧なお辞儀をした。そして机に積まれたいくつもの本の中からある一冊を取り出し、開いた。  
 「折角の客人だからね。こんな物語を知っているかい? とある街に暮らす高校生カツブルの話だ——」

——その男女が住んでいる地域には古くからある一族が住んでいた。

一族には少し特殊なしきたりがあつて、例えば『生まれてくる子供には花に関する名前をつける』。これは花そのものの名前でもいいし、花言葉を込めるでもいい。

——そして特殊なのが『名付けに用いた花をアクセサリーとして、肌身離さず持ち歩く』というものだ。ちなみに彼氏の方がその一族の人間だということは先に話しておくよ

「おつそーい!!」

早朝の住宅街に私の声が木霊する。

私は今日、ほんのちょっぴり不機嫌だ。

こんな朝早くだというのに不機嫌なのには理由がある。それは、約束の時間になつても集合場所である私の家に彼が来ていなかつたらだ。

普段なら私が家を出るときには、彼は既に家の前で復習をしているくらいなのに、今日は見える範囲に姿さえ見えない。

「ごめん！　おまたせ!!」

朝の住宅街に慌ただしい声が響き、私はそちらを振り向いた。

「遅いよっ！ 何してたの？」

私は少し怒ったような振る舞いをしてみる。 第三者視点で見たら、多分『ぶんすか』などの擬音がつけられていることだろうが、幸いにもまだ周辺にご近所さんの影は無いため、これを見てるのは彼だけだと思いたい。

「ホントにごめん！ 顔見知りのおばあちゃんの荷物持ちしてたら井戸端会議に巻き込まれちゃって……」

「そうなんだく。 朝早くから相変わらずキヨウ君は『立派ですか』

「 うかが？ 」 でも、そんなこと言つたら君だつて、土日に朝から休日返上で『近所さんの子供達の相手してるじゃないか。

週によつてはボランティアで保育所に行つてるし。 父さんが『保育士になるならば、ぜひ私から推薦したい』って言うほどに頑張つてゐて聞いたよ？」

彼からの流れるようなカウンターに「はうう」と恥ずかしさに声が漏れる。 多分、私の顔はいくらか赤くなっているのだろうと思う。

「 さ、早く学校に行こう。 遅刻しちゃつたら大変だからね」

私は、未だに熱っぽい頬をペチペチと軽く叩いてから、彼の後を追つて歩き始めた――

### 『キーンコーンカーンコーン』

校内に放課のチャイムが鳴り響き、クラスメイト達がせかせかと急いで帰っていく。

(――昼休み頃から空模様が良くないし、みんな雨が降る前に帰りたいんだろうな)

私は彼に貰つたお守りのペンダントの紐をつまんでゆらゆらと揺らしながら、教室の端に生けてある桜を眺めていた。

「おーい、コウ。俺たちも急いで帰ろう！　傘を忘れてるから雨に降られると不味い

「分かった！　今行く。　幽雨、桜のこと任せちゃつていい？」

「ん、任せられた」

「ありがと！　――また明日ね！」

桜を友人の幽雨<sup>ゆうう</sup>に任せて、私達も雨が降る前に家に帰ろうと急いで帰路を辿るが、家と学校の中間くらいに差し掛かったところで、ぱらぱらと雨が降り出してきた。  
「不味い、降ってきた。　とりあえずコウの家まで走るよ!!」

「分かった！！　あのさ、今日は」

「――後で聞くから今は走つて！」

そう言つて彼は、私の手を引いて駆け出し、あつという間に私の家まで到着した。

「——キヨウ君、ありがとう。あのさ、今日は両親いないから、良ければ、その雨宿りしてく？」

「大丈夫。でも傘だけ貸して貰つていいか？」

——それじゃ、また明日迎えにくるよ。風邪ひかないよう気をつけて！」

彼は玄関から飛び出し、大雨の中を走つて行つた。その背中を見送りながら、『雨宿りくらいしていけばいいのに』と小さく私は呟いた。

彼の背が見えなくなつた頃、私は『くしゅん』とくしゃみをしたことで、相当体が冷えていると気付いた。私は風邪をひかないためにも、雨で冷えた体を温めようとシャワーを浴びることにした。

「ふう、さっぱりした。——キヨウ君ももう家に着いた頃かな」

バスタオルを首にかけ、ほくほくのまま部屋に戻つて荷物を片付けていると、ふとペンダントに違和感を覚える。

「中の青い花が散つてる」

ペンダントに着いている、半透明な樹脂に覆われた青い桔梗の花が、枯れて千切れていった。それを見て、ふと何かが脳を刺激するが、霧に包まれていてかのように思い出せない。

すぐに彼に聞こうかと一瞬迷ったが、急激に眠気が襲い掛かってきたため『明日聞けばいいや』と、私はベッドに入つて、眠りについた。

翌朝、彼は私の家に来なかつた。

私は仕方なく、『先に学校行つてるね』とだけメールを送り、ひとりで登校した。

久しぶりにひとりだけで歩く通学路は広く、なんだか学校が遠く感じた。

教室に着き、始業のチャイムが鳴る。その時には既にクラスメイトは彼を除いて全員揃つていた。

「おはようございます」

扉を開いて先生が入つてくる。その顔は普段より暗く見えたため、教室がざわつくが、教壇に登つた先生が話し始めたことで、みんなが口を閉じた。

「ひとつ、皆さんに悲しい報せがあります。——昨日の放課後、このクラスのあだばなききょうう  
徒花桔梗くんが下校途中、通り魔により刺されました。

偶然近くを通りかかった人がすぐに救急車を呼んでくれたため、病院に搬送されましたが、今朝、亡くなつたそうです

その言葉を聞いて、私は頭が真つ白になつた。

昨日の放課後。それも下校途中ということは私の家から彼の家までの間で——とい

うことだ。

その瞬間、昨夜ペンダントを見たときに脳を刺激していた記憶を思い出す。

「そうか、そうだったんだ」

悲しくて涙が流れ出す。

あの時、私が無理矢理にでも引き止めていればこの結末は回避できていたかも知れな

い。  
そう思うと悔しい思いでいっぱいだった――

# 花一2

「それからの彼女は授業に身も入らず、ただ虚無だつた。そして、その日もまた、一輪の紅い花が押し潰されたかのように散つて いた そ う な——」

「僕は、ばたんと本を閉じて彼女に語りかける。

「とまあ、こんな物語だ。いかがだつたかな?」

「ふむ。どうかしたのかね? この物語を聞いて悲しくなつたのかい?」

そう質問をすると、彼女は泣きながらも顔を上げて別の質問を返してきた。

「——間違つてたらごめんなさい。この物語つて『私の』物語ですよね?」

「——ほう? 記憶を取り戻せたのかい! そうさ。これは君の辿つた物語だつたものだよ

微かに驚きながらもそう答えると、彼女は再びの涙とともに後悔を口にする。

「あの時、彼を無理矢理でも引き留めていればこんな事にはならなかつたのに——」

そして目を伏せた彼女に、僕は問いを投げかけた。

「結末を変えたいかい？ この救い無きバッドエンドを・変えたいかね？」

「変えたい!! ——私はどうなつても良いから・彼を助けられさえするなら・私は悪魔に魂を売つてでも、あの結末を変えたい!!」

瞬時に返された答えを聞いて、多分だが僕の顔は喜ぶように、凄く悪い顔をしているのだろうと思ひながらも、表情を変えずに願いの対価を思索する。

「君の決意は良く分かつた。結末を変えたいのならば後ろの扉から行くといい。——君の決意に免じて、今回の対価は、そうだな・ハッピー・エンドで手を打とうか」

告げると同時に、パチンと指を鳴らすと、彼女のすぐ後ろに他とは微かに色の違う扉が出現する。すると彼女は扉を蹴破らんばかりの勢いで押し開けて、その先に広がる闇へと走つて行つた。

「さて、ここからは傍観するだけだ。——飽くまで僕は観測者だからね」

「はつ、はあつ」

私は図書館の扉をくぐり、扉の先にある真っ暗な一本道を全力で走る。道は来たときのものと同じく先が見えない程に暗く、しかし不思議とまつすぐ進めば辿り着く。そんな気がしていた。

「はあつ、はあつ、はあツ」

どれほど走り続けただろうか。気道は乾き、腕や足には疲れによる痛みを感じる。同時に、このまま辿り着けないのではないか。そんなマイナスな考えが生まれ、全身から少しづつ力が抜けていく。

瞬間、踏み込んだ足場が消えたかのようにゆっくりと体が前に倒れこむ。反射的に受け身を取ろうと地面に手をつくが、疲れ切った腕では自重を支えきることは敵わず、私の体は勢いよく地面に叩きつけられた。

長い時間走ったことによる疲労と叩きつけられた痛みがごちゃまぜになり、私の意識すら持つていかれるようになる。

「まだ・諦めない・折れてやるもんか」

「・・・・・ブルブルと震える腕を支えに、なんとか自身の体を起こし、立ち上がる。

「・・・・・あれ？」

しかし、一步を踏み出したと同時に再び崩れ落ちた。

これで終わるのなら、あの時にキスのひとつでもしておけばよかつた。と後悔する。

——瞬間、カラーンという音とともに黒の空間に小さな赤い光が出現し、私はそれに手を伸ばす。

それは私の手に収ると同時にどんどん光を強めていき、視界を覆い尽くす。

ぱつり。と肌に冷たいものが触れ、私はいつの間にか失っていた意識を取り戻す。そこはいつも見ていた町並み。あたりは薄暗く、空は暗雲に覆い尽くされている。

「雨？」

私がつぶやくと同時に、ぱらぱらと雨粒が増えて、あつという間に纏っていた衣服をびしょびしょに濡らす。

「——不味い、雨降ってきた」

僅かに後方から聞こえた聞き慣れた声は、私の心に優しく染み込んでくる。

「キョウくん？」

「コウ、どうかしたの？——ま、いいや。とりあえずコウの家まで走るよ!!」

再び鼓膜を震わせるその声は、この世界を夢かと疑った私に、確かな現実であると理解させるには充分だつた。

「コウ、ほんとにどうしたのさ。とりあえず走るよ!!」

力強く繋がれた手から感じる彼の温もりは、悲しみしかなくなつていた私の心にそれ以外の感情（いろ）を取り戻させた。

「！　うん!!」

涙声ながらに絞り出したその一言を、彼は疑問に思うだろう。でも、それでもさつき

まで失っていた喜びの感情（いろ）は、私の中に隠しきれない程に大きくなっていた。  
彼に引かれるままに雨の中を走り抜けて、運命の分岐点となるであろう私の家に辿り着く。

「それじゃあまた明日。風邪ひかないよう体に気をつけてね」  
サツと身を翻し、出ていこうとする彼の手を掴んで呼び止める。

「待つて!!」

「どうしたのさ？ コウ、さつきから少しおかしいよ？」

さつきの外での事も相まって、彼からは疑問だけでなく、少しだけ怖がられている様にも感じた。

だが、その程度のことを気にしてられる状況じやない。彼の生死がかかっているのだからと覚悟を決め、伏せていた顔を上げて彼の目を見る。

「あのさ、両親が明日までいないから泊まつていってよ。雨も酷いし——私も寂しいし」

あの時は恥ずかしくて胸の内に隠していた言葉を紡ぐ。

正直な所、恥ずかしくてすぐにでも目を逸らしたい。だが、あの未来を防ぐためには一步も引くことはできない。

「駄目かな？」

玄関が沈黙に包まれる。あの時の喪失感が頭をよぎり、同時に無限にも思えたあの悲しみが蘇り、だんだんと視界がぼやけていく。

それからどれくらいの時間が経つただろう。ドクドクと脈打つ心臓が彼に聞こえるのではないかという程にうるさく思う。

「分かった」

一瞬にも永遠にも感じる沈黙の中、不意に彼は言つて、外に向けていた足を中心に戻した。

「いいの？」

「ああ、泊まつてくれよ。でも母さんに連絡だけさせてくれ。変に心配されたくないからさ」

そうして、彼が私の家に泊まることになつた。

——結論から言うと、彼が死ぬことはなかつた。

一応、事件 자체は起こったのだが、死傷者は無く、犯人が捕まつただけだと翌朝のニュースでやつていた。

犯行に使われた刃物も発見されたが、刃の部分が二つに割れていたとだけ報道された。

学校で聞いた噂では、通り魔が刺しに行つた相手が武道あるいは格闘技のプロだつ

た。とか、自衛隊の人だつたとか様々なものがあるが、眞実は分かつていなうそだ。

「それから彼らは何事もなく卒業し、結ばれて二つの子宝と共に暖かく幸せな家庭を築いたそなう」

物語が終わり、あとがきを読もうと残りのページをめくつていく。すると、あるページで手が止まつた。

「ほう？」結婚式と家族の写真か。

挿絵には最適だね。そういうえば彼の名前——桔梗には『永遠の愛』とか『誠実』。彼女の花、千日紅には『色あせぬ愛』と『不朽』。それぞれ花言葉があつたね

本を閉じ、棚にしまう。

やはりハッピーエンドも悪くはないなと思いながらいつの間にかテーブルに置かれてあつた紅茶をする。

「それにしても、互いの心が離れぬよう。と『名付けに用いた花のアクセサリーをエンゲージリングとして使う』というのも中々に特殊なものだよねえ」

全くこれだから人間というものは面白い。くつくつと笑みを溢しながら次の本を手に取つた。

「さて、次の客人は何時如何なる物語を持つてくれるのか——楽しみだよ」  
そんなつぶやきは果ての見えない吹き抜けに吸い込まれていった